

りんご黒星病の増加に注意

～ 園内の発生状況をよく観察し、防除を徹底してください ～

1. 現在までの発生状況

鹿角市予察ほにおける初発日は5月17日（前年5月15日）で前年並であった。

5月中旬の巡回調査におけるふじの発病果そう率は0.0%（平年0.1%）で平年並、発生地点率は4.5%（平年0.9%）で高かった。

5月23日に仙台管区気象台発表の東北地方1か月予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か少ないと予報されている。

6月以降の伝染源は樹上の発病葉や発病果実に形成される分生子となり、降雨が続くと発生が増加するため、園内の発病状況をよく観察し、今後の防除対策を徹底する必要がある。

2. 防除対策

(1) 耕種的防除

- ・発病葉や発病果実は袋等を集め、土中深くに埋めるか焼却する。
- ・葉では、最初淡緑色の小斑点として現れ、その後不規則に病斑を拡大し、黒緑色になり胞子を多数形成してすす状を呈する（図-1、左）。時間が経つとこぶ状に盛り上がるものもある（図-1、中央）。葉の表面に発病するケースが多いが、裏面にのみ発病するケースもある（図-1、右）ため、注意深く観察する。
- ・果実では、最初黒緑色の小斑点として現れ（図-2、左）、拡大して黒褐色のカサブタ状になり（図-2、右）、果実肥大に伴って奇形や裂果となる。
- ・薬液が樹全体によくかかるようにするため、枝の配置を見直し、不要な徒長枝は整理する。

(2) 薬剤防除

- ・防除薬剤は表-1から選択するが、Q o I 剤耐性菌と同様の遺伝子変異が確認された園地や広範囲に発生している園地等ではQ o I 剤の使用を中止し、保護殺菌剤を10日間隔で散布する。
- ・Q o I 剤は耐性菌出現を回避するため、年2回以内の使用にとどめる。
- ・散布予定日に降雨が予想される場合は、散布を前倒して雨前散布に努める。
- ・成木園の散布量はスピードスプレーヤーで500L/10a（700L/10aまで）を目安とする。

3. 資料



図-1 葉の発病状況



図-2 幼果の発病状況

表-1 りんご黒星病の防除薬剤

分類	薬剤名	希釈倍数	散布時期	使用回数	各成分の総使用回数
E	パスポート顆粒水和剤	1,000倍	6月中旬～7月中旬	3回以内	ア
B	アントラコール顆粒水和剤	500倍	落花25日後頃まで	4回以内	4回以内
B	チオノックフロアブル	500倍	〃	5回以内	イ
B	トレノックスフロアブル	500倍	〃	5回以内	イ
B	ジマンダイセン水和剤	600倍	〃	3回以内	ウ
D	オーソサイド水和剤80	800倍	開花直前～収穫前日	6回以内	エ
D・F	アリエッティC水和剤	800倍	〃	3回以内	エ、オ
A	キノドール水和剤40	600倍	6月中旬～8月上旬	4回以内	カ
A	キノドールフロアブル	800倍	〃	4回以内	カ
A	ドキリンフロアブル	800倍	〃	4回以内	カ
A・D	オキシラン水和剤	600倍	〃	4回以内	エ、カ
D・O	ダイパワー水和剤	1,000倍	6月中旬～収穫前日	* a	エ、キ
J・S	ナリアWDG	2,000倍	〃	3回以内	ク、ケ
S	フリントフロアブル25	2,000倍	〃	4回以内	4回以内
S	ストロビードライフロアブル	3,000倍	〃	3回以内	3回以内

分類 A:銅剤 B:有機硫黄剤 D:ポリハロアルキルチオ剤 E:有機塩素剤 F:有機リン系剤 J:SDHI剤
O:グアニジン系剤 S:QoI剤

使用回数 *a 6回以内(但し、開花期以降散布は3回以内)

各成分の総使用回数

ア:TPN(3回以内) イ:チウラム (5回以内) ウ:マンゼブ(3回以内) エ:キャプタン(6回以内)

オ:ホセチル(3回以内) カ:有機銅(7回以内(塗布は3回以内、散布は4回以内))

キ:イミノクタジン(8回以内(液剤及び水和剤は合計6回以内(開花期以降は3回以内)、塗布剤は2回以内))

ク:ピラクロストロビン(3回以内) ケ:ボスカリド(3回以内)

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所	TEL	018-881-3660
秋田県果樹試験場	TEL	0182-25-4224
かづの果樹センター	TEL	0186-25-3231
掲載HP https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/		